

# アメリカ建国とアメリカの庭園

## Bartram's Garden を中心に

竹腰 佳誉子

### はじめに

トマス・ジェファーソン (Thomas Jefferson) は独立革命期のアメリカにおいて、ナチュラル・ヒストリーのアプローチでもってアメリカの知的独立やアイデンティティの確立に大きな影響をもたらした。ジェファーソンの『ヴァージニア覚え書』(Notes on the States of Virginia) 執筆の目的は、直接的にはフランス公使館の書記官だったバルベ＝マルボア (Barbé-Marbois) からの質問に答えるためであったが、それだけではなく当時ヨーロッパに流布していた「新大陸退化説」を覆すためであったといえる。『覚え書』において最も多くのページを割いている 6 章で、ジェファーソンはヨーロッパと北米の四足動物について客観的に比較するだけにとどまらず、ヨーロッパの偉大な博物学者ビュフォン伯 (Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon) に「新大陸退化説」を訂正してもらった最善策として、ビュフォンに大型の四足動物の現物を見せるためにマンモスやヘラジカなどの骨の発掘に熱心に取り組んでいた。このことから当時のナチュラル・ヒストリーが単なる学術的な手段だけではなく、政治的な手段でもあったことが分かるだろう。本発表では、独立革命期のアメリカにおけるナチュラル・ヒストリーのアプローチが当時のアメリカの国家形成や思想形成にどのような影響をもたらしたのか、特に当時の知識人と庭園との関わりから考察したいと思う。

### 1. 独立革命期におけるナチュラル・ヒストリーと知識人たち

コニフが言うように 18 世紀および 19 世紀半ば頃においては、自然界への物知りな関心は、教養のある集団では、ほとんど必須条件と言えるほどであり (57)、独立後間もないアメリカという国の礎を築いた知的集団にとって、自然界への関心は欠かすことができないものであった。そしてジェファーソンのナチュラル・ヒストリーのアプローチは、新生アメリカ共和国が目指すべき姿を庭園に投影していたことも見逃すことはできない。フィラデルフィアで憲法制定会議が開催されるちょうど 1 年前に駐フランス公使だったジェファーソンはイギリスとの通商交渉が難航し苦悩していたジョン・アダムズ (John Adams) の依頼によりロンドンに来ており、わずか 2 週間ほどで 16 の庭園を訪問している。

最初に訪問したウォバーン・ファーム (Woburn) では、美しい木立とこざっぱりとした農地というユニークな融合にジェファーソンは非常に感心し、ウォバーン・ファームについて次のように述べている。

The gardens of the Count Durazzo at this place are extremely well worth seeing. They exhibit a very rare mixture of the *utile dulci*, and are therefore peculiarly to be attended to by an American. Woburn farm in England is the only thing I ever saw superior, in this point, to Count Durazzo's gardens at Nervi. (Jefferson; emphasis added)

ウォバーン・ファームの優れている点は、「実用的なものと楽しめるものの融合」である。ジェファーソンは崇高な美と国全体を養えるほどの広大な土地の両方を持つアメリカの姿をその庭に重ねたのだろう。またジェファーソンは後日アダムズとともにイギリスで最も有名な庭園の一つであるストー (Stowe) を訪問している。ストーはホイッグ党のメンバーだったカバン卿によって作られたものであり、ホイッグ党は自分たちの政治思想を表現するために庭園を利用し始めていた頃だった。整形式庭園からの脱却は、木立がまるで樹木が元からその場所にあったかのように、田園風に移植されることによって体現された。ジェファーソンはストーの庭園のような風景式庭園を敬愛しており、人工的な庭園についてはいつも批判的であった。

そして独立革命期においては、アメリカの木々や植物がイギリスの庭園で流行しており、まさに庭園での主役となっていたことはジェファーソンやアダムズにとって特別な意味を持ったのではないだろうか。イギリスでの北米産の植物の繁殖は旧世界において新世界の魅力、つまりエキゾチックな真新しさを高めているだけでなく、若き共和国が持つ商業的源泉の可能性を確約していたと言える。

### 2. フィラデルフィア憲法制定会議とナチュラル・ヒストリー

1787 年 5 月から約 4 か月間にわたってフィラデルフィアにおいて、憲法制定会議が開催された。興味深いのは、最長老のフランクリンを含む 55 人の代表者のうち半数以上が農園主等の経歴があり、農業や植物に対

する造詣が大変深かったことである。このような農業、園芸、植物に対する関心の高い代表団たちは、憲法制定会議中に園芸に関する情報交換を行うとともに、時々近くにある庭園を訪れていた。そして憲法制定会議が始まって約 2 か月がたった 7 月 14 日早朝、ニューイングランドの植物学者マナセ・カトラー (Manasseh Cutler) とともに、7 人の代表者たちはスクールキル川沿いのバートラム親子 (John Bartram, William Bartram) の庭を訪問している。

### 3. バートラム親子の庭

父親のジョンは自身の庭を造り始めたころから、野生の植物の生息地を自らの庭でも再現しようとし、植物の生息地の土壌や状況に合わせて、植物や木々を庭に配置した。このようなジョンの庭は、そこを訪れる人たちにとっては、必ずしも好ましい印象をもたらすものではなかったようである。その理由は、ジョンがあまりにも自然を奔放にさせすぎているように見えたからである。7 月 14 日に初めてウィリアムの庭を訪れたカトラーも“every thing is very badly arranged, for they are neither placed ornamentally nor botanically, but seem to be jumbled together in heaps.”(273)と評している。カトラーは、バートラムの庭にある植物のコレクションについて、このような庭は他にはないとも語っており、ごちゃ混ぜの庭は多くの博物学者、旅行者、政治家たちを魅了した。彼らの訪問の目的は、フランクリニアに代表されるそこにしかない新大陸の植物を見ることであり、ウィリアムが記録した『旅行記』(Travels)において描かれている崇高なアメリカのナチュラル・ヒストリーを見ることであった。

#### まとめ—バートラムの庭とアメリカの風景

憲法制定会議に出席していた代表者たちがバートラムの庭に束の間の休息を求めて訪問していた頃の憲法制定会議は、いかなる状況だったのだろうか。7 人の代表団がバートラム親子の庭を訪問した時は、第一院(下院)は人口比で議員数を選出し、第二院(上院)は各邦が少なくとも一票を持つ、いわゆる大妥協と呼ばれるコネティカット案に関して膠着状態が続いていた頃だった。7 月 2 日のコネティカット案の賛否を問う決議を取った際には、賛成、反対が同数であったが、7 月 14 日のバートラム庭園訪問直後の 7 月 16 日の最終投票において、10 州の代表団が投票を行い、5 対 4 でコネティカット案が可決されたのである。何がケイレブ・ストロング(Caleb Strong)やノース・キャロライナ代表団の気持ちを変化させたのであろうか。投票直前に訪問したバートラムの庭が彼らに影響を及ぼした可能性はあるのだろうか。ストロングはバートラムの庭を訪れたその日の午後の会議でアメリカの分裂の可能性について懸念を示している。彼がバートラムの庭を訪問したこととその後のコネティカット案への賛否の変化の関連性に関して、残念ながら裏付ける客観的な証拠と言えるものは今のところ見つけることはできてはいない。バートラムの庭園は、生来の植物の生息地を再現させたような、自然を奔放にさせすぎているようにも見えるのが特徴であったが、このことは訪問者にアメリカのランドスケープを想起させるものだったのではないだろうか。スローターは、ウィリアム・バートラムはバートラムの庭園を訪れていた各州の代表者とは異なり、彼自身はもちろん建国の父ではないが、バートラムの庭は、知識人たちのサロンであり、バートラム自身は偉大な政治家、科学者、文学者に求められる存在であったと指摘している(248-49)。つまりアメリカのランドスケープを想起させるバートラムの庭園やそこで交わされるバートラムとの会話は、新しく誕生した国作りに携わった知識人たちに大きなインスピレーションを与えたと考えられる。マークスが“the American landscape inevitably was perceived as a *seedbed* of republican virtue” (16; emphasis added) と語っているように、バートラムの庭は植物を育てるだけでなく、二重の意味で“seedbed”の役割を果たしていたと考えられる。バートラムの庭、あるいは彼の庭が想起させるものがアメリカのナショナリズムの基盤とも言えるものを形成していたのではないだろうか。

#### 主要引用文献

- Conniff, Richard. *The Species Seekers: Heroes, Fools, and the Mad Pursuit of Life on Earth*. W. W. Norton & Company Inc., 2011.
- Cutler, William Parker and Cutler, Julia Perkins. *Life, Journals and Correspondence of Rev. Manasseh Cutler, LL.D.* Wentworth Press, 2016.
- Jefferson, Thomas. “Jefferson’s Hints to Americans Travelling in Europe, 19 June 1788,” *Founders Online*, National Archives, <https://founders.archives.gov/documents/Jefferson/01-13-02-0173>.
- Marx, Leo. *The American Revolution and the American landscape: Delivered in Cabell Hall, the University of Virginia, Charlottesville, Virginia, on March 27, 1974*. American Enterprise Institute for Public Policy Research, 1974.
- Slaughter, Thomas P. *The Natures of John and William Bartram*. University of Pennsylvania Press, 1996.